

アントロポセン

人新世の地球環境と農業

石坂匡身・大串和紀・中道 宏著, 一般社団法人 農山漁村文化協会 発行

(出版年月) 2020年3月, 231 pp. 定価 1,800円 (本体)

著者は知識・経験の豊かな熟年の3人, 元環境事務次官の石坂氏・元九州農政局長の大串氏・元農水相構造改善局次長の中道氏による総合化・取りまとめ・執筆である。

本書の発行の発端は地球の環境は物質と生命が循環する事によって維持されており, その循環機能に依存する農業のあり方を通して地球環境問題への対応を論じられないかと, 2008年に開設したWebサイト (Seneca21st) に多くの識者から話題提供を受けた事から始まる。

提供された話題は, 専門的で多岐に渡る内容の集約の難しさと苦境にある日本農業のあり方を通して, 地球環境問題への対応を論じる事も多難であるが, 先人が培ってきた知恵にも習い, 健全で (物質と生命の循環) 活発な (循環を促進) 農業の展開が国土経営を安定させ, 国の安全保障, 地球環境問題にも資する事を, 提案するに至ったとされている。

「地球は, 11,700年前に始まった完新世から近現代の人間活動, 人口爆発の影響で, 1950年前後に新たな地質時代である Anthropocene = 人新世に入ったといわれる。人間による地球環境の激変をもたらすものである。この激変をどう防ぐか, 人類はいかに生きていくべきか, それが本書のテーマであり, その鍵は「物質と生命の循環の回復」にある。」と最初に記載されている。

はじめに

初章 限界値を超えた地球環境問題

1章 「人新世」の地球環境問題の本質

1. いろいろな地球環境問題, 2. 物質と生命がともに循環して地球環境は維持する, 3. なぜ対応が遅れたのか - 気候変動を例に, 4. 文明と環境

2章 文明が持続するための働きかけ

1. 環境と経済と社会の統合 - SDGs, 2. 人類が育んできた叡智を習う - 日本からの発信

3章 私たちは地球環境問題に対応できるか

1. 人口増加は止まるのか, 2. 資源浪費型社会から脱却できるか

4章 環境倫理 どう考えていくべきか

1. 環境倫理とは, 2. これからの方向

5章 地球環境問題の最大の課題は農業

1. 農業と地球環境の密接なかわり, 2. 90億人を養うのか, 3. 日本の国土に窒素・リンがあふれている, 4. 生命が循環しなければ物質は循環しない, 5. 気候変動による農業への影響

6章 健全で活発な農業生産を

1. 世界の食料事情が緊迫するなかで国民を養っていけない, 2. 日本の農業は物質と生命の循環を阻害している, 3. 健全で活発な農林業生産が不可欠である, 4. いくつかの試みがあるが, 進んでいない, 5. 施策を総合化する, 6. 公的支援と社会資本整備, 7. 地域でコモンズを育み, ビジョンを共有する

7章 農業から地球環境問題に展望を拓くいくつかの試み

1. 本来の畜産に可能な限り回帰する, 2. 木質バイオマスを健全に循環させる, 3. 気候変動に備え水利システムを恒常的に見直す

終章 日本農業が先頭に立ち, 地球環境問題に取り組もうおわりに

目次がなんと11頁もあり驚くが, 取り扱い・関連範囲の広さを物語っている。各章の内容は, 次のとおりである。

初章: 近年の人類の活動は, これまでの宇宙の影響に匹敵するような規模で, 地球環境システムに大きな変化をもたらしており, 地球の機能を制御する様々なシステムの幾つかが人類の望まない状態に急変しうる生物物理学的限界を示している。

1・2章: それは地球のシステムを維持する「物質と生命の循環」が機能しなくなっているからである。

3・4章: この文明を維持させるための働きかけが世界中で始まっており, 現在の資源浪費型社会を脱却し, 物質と生命が健全に循環するように人間の活動を律する事が必要とされている。

5章: 人類にこの豊かな文明をもたらした農業も地球環境に大きな影響を与えており, その対応が最大の課題となっている。

6章: 特に日本において, 農業が依拠する「物質と生命の循環」機能が損なわれ (健全でない), 促進されず (活発でない), 国民の食料を確保できず, 国土経営を不安定にし, 地球に負荷を掛けている事から, 「物質と生命の循環」の視角から, 農業への環境支払制度を確立する, 農村地域で持続的な農業農村を創るためのビジョンを共有する, 地域で各種施策を総合化する事が必要である。

7章: 具体的な試みとして, 本来の畜産に可能な限り回帰する, 木質バイオマスを健全に循環させる, 気候変動に備え水利システムを恒常的に見直す事を提案している。

範囲は非常に広いが, 農業気象関係では, 次のとおりである。

1章1節の「いろいろな地球環境問題」に気候変動, オゾン層の破壊, 酸性雨, 水質汚染, 海洋汚染, 森林減少, 砂漠化, 生物種の急激な減少, 環境問題は土地利用と密接に関係するが記述されている。

1章3節の「なぜ対応が遅れたのか - 気候変動を例に」

<http://agrmnet.jp/wordpress/wp-content/uploads/2020-C-4.pdf>

2020年4月18日 受付

Copyright 2020, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

があり、温暖化の感知、危機意識、グローバルな取り組み、世界平均気温を産業革命以前と比較して2℃よりも1.5℃に抑える努力の追求、IPPC 特別報告書、パリ協定は成立するか等である。そして5章5節の「気候変動による農業への影響」があり、気候変動の態様（2018年の最早の梅雨明け、西日本豪雨、41.1℃の最高気温更新、逆走台風等に対する温暖化の影響）、各地域で気候変動への適応策を（気候変動・温室効果ガス削減への社会経済的適応策）、農業に密接に関係する気候変動（気温、降水量、極端現象、

水利・防災）、気候変動の日本農業への影響とそれへの適応策（水稲、畜産、果樹、農業生産基盤、森林・林業、水産業）等である。

なお、本文の内容とは全く関係ないが、私は表紙カバーを外して読む習慣があるが、内部表紙面を持って読むと、印刷の問題か、指・表紙ともに黒ずんだ。

最後に、地球環境問題下での農林畜水産業の方向性を総合的にまとめた本書を読まれることを願っています。

（本会名誉会員、九州大学名誉教授 真木太一）